ける人間と政治(高田三郎)

第二部　哲學及び哲學史　理性の根據に就いて(高山岩男)、解釋學と修辭學(三木清)、存在と無限—無限の概念について哲學史的考察—(三宅剛一)、ミケランゼロの同心(木村素衛)、物自體と理念(高坂正顯)、惡の根源の問題—殊にカントとシェリングに關して—(安倍能成)、カントからヘーゲルへの論理(田邊元)、ニイチェのツァラツストラとマイスター・エックハルト(西谷啓治)

第三部　宗教學及基督教神學　學としての神學—神學のロゴスの特殊性格—(松村克己)、聖なるもの—オットーの批評を中心として—(片山正直)、シュライアマッハーに於ける「高次的實在論」—「講演」の一考察—(中村明)、バルト神學に於ける中心的なもの(菅圓吉)、歴史的・批判的方法と靈的理解—バルト神學に於ける一つの問題—(佐野勝也)、舊約宗教に於ける人間觀に就いて(石原謙)、「神の國」と「人の子」(一平信徒の歴史觀の一節)(神田盾夫)、パウロの神學に於ける聖化(山谷省吾)、明治維新の教化統制と平田神道—信教の自由の公認まで—(村岡典嗣)、後記(石原謙)(新版五九四頁、昭和十三年九月、東京岩波書店發行、定價三・六〇)

(前川貞次郎)

Population Movements.

By Robert R. Kuczynski

世の中はめまぐるしい。失業は過剰人口の爲だ、あの人は子供が少いから裕福だ、と思つてゐたら今日では失業は過少人口に基くと云ふ事であり、あの家は子供のお蔭で勳章を貰つた許りか、年金の爲に内福ださうだ、と云ふ國もある。二十年前の眞理は一片の虚構と化し去つてゐる人口論の變遷、其は現代の歐洲社會の動搖を如實に示したものと云へよう。

本書はロンドン大學に於ける三つの公開講義から成つてをり、各部は夫々獨立のものではあるが、八十頁の小著の中に人口研究についての貴重な、暗示に富むを意見を展開し、人口推移についての通俗的意見の誤謬を指摘すると共に、平易な説明、叙述によつて人口研究への一般人の興味を誘ふ樣な内容をも盛つてゐる。

第一部に於て、先づ地球上の人口について吾人の知識が如何にして得られ、その基礎となる人口統計がどの程度の信頼を置けるものかを論じ、諸大陸の最近百年間の人口の推移を略述する。かくて近代に於ける最大の人口の推移の見られるのがアメリカ大陸であり、そこに黑人及白人による居住が如何にして行はれたかを幾多の史料を引用しつゝ論證してゐる。著者は奴隷貿易による黑人移入數に關する通説の見積りが過大に失する事を當時の海運業等の經濟史的見地より説明してゐるが、此はアメリカ大陸に於ける眞の意味の居住が先づ黑人により行はれたとする意見及び移住當初の人口增加の不振を男女の數的不均衡に基くとなす見解と共に注意すべき點であらう。移住者數を正確に知る事の困難は二十世紀初頭に至るも旅客統計しか無い國々が多かつた事を顧みれば判然する。就中、白人について著しい。併し、一四九二年以來の移住者は黑人千五百萬、白人四千萬で、現在各〻四千萬、一億七

千二百萬と見てゐるのは妥當であらう。

第二部は人口增減の研究、就中、歐洲の人口傾向の一權威である著者が近代の人口增加、並びに大戰後の人口停滯について縱橫に論じたものである。一七七〇年以來の增加は主として死亡率の減少により說明されてゐるが、此れとても通常の概算死亡率によつて示される程大でない。かゝる樣相を呈する所以は乳幼兒死亡の減少、長壽者の增加に基づくものであるが、將來とも、平均年齡が八十歲に達する事はないとしてゐる。マルサス以來の過剩人口に對する恐怖が生んだ急激な人口增加の原因を多產にありとする通俗的意見にも、死亡率の解剖と同樣に年齡構成の分析から出發して批判を加へてゐるが神話的な俗信が錯覺(optical illusion)と結合して John Grant 以來 W. Winkler に至るも尙、統計學者中に見出されると云つてゐる。fecundity（生產能力）が文化と共に向上するかせぬかの問題も興味はあらうが、重大な事は此が fertility（受胎率）として如何に現れるか、受胎率の現狀は如何かである。著者は白人居住地域を三型に分ち、現在の母性（十五—五十歲）と未來の母性との比較より見て西北歐に於ける出產力の低下を注意してゐる。

第三部では、かかる人口減少の傾向に對する社會的、政治的手段による人口增加策にふれ、ドイツ、イタリーの失敗を統計上より論じ、避姙法の流行とその社會的、經濟的背景を示す。併し、かゝる大革命が經濟機構の變革を伴はずして起つたものであり、世界の產業機構が人口增加を目算に入れて經營されてゐる現況は人口が現在の出生、死亡率により推移するならば將來人口減少を來たす事を全く無視した冒險であるとするのは些か白人中心、就中、英帝國に忠にすぎはしまいか。とは云へ、子供を持ちたくない、子供が失業者を作り出す、と云ふ世上の意見が近來の人口現象の根幹をなしてゐる事は否定し難い。そこに人口論の動搖があり、人口政策が華かな脚光を浴びて國策の第一線に登場した所以がある。最後に、附錄には世界各地の資料を種族別に豐富に擧げて居り、人口研究家に取つて多大の便宜を與へてゐる事を特記して置きたい。(Oxford; 1936. Price 5 S.)〔伊藤〕

ジヨン・ロツシング・バツク編
支那の農業

鹽谷安夫
仙波泰雄 共譯
安藤次郎

我が國と支那との關係は、同文同種、唇齒輔車、離るべからざるものと云はれながら、とかく圓滑を缺き、遂に今次の事變となつたが、支那の社會・經濟の現狀に關する認識が、著しく不足したことも、殘念ながら認めねばならぬ。

これに對して、北米合衆國からは、多數の有能な學者が出て、多方面に亘り、支那に關する實證的研究を進めた。これは、支那と合衆國とが自然事情に於いては多くの類似性を示しながら、社會的には、新開國と舊國、餘裕ある國と人口過多なる國、世界最高の生活程度と飢餓線一杯と云ふ風に、極端な對照を示し、驚異